

挨拶のことばと源氏物語

—— 其の一、竹取物語と宇津保物語と枕草子から ——

上野辰義

〔抄録〕

挨拶という行為は、人間の日常・非日常の生活において絶えず実践されているものだが、その研究は社会学や心理学、言語学等においてまだまだ十分進展しているとはいえない。しかし、人間の生活から切り離すことのできないこの行為は、人間の行動のすみずみまで浸透している。知的な営みである文学においても例外ではない。却って文学は、挨拶を観察する資料でもありえる。本稿

では、そうした視点から、挨拶と文学の有機的な関係と文学表現としての実態を、平安時代の古典を対象に考察し、国文学の立場から作品理解に資することを願う試みである。

キーワード 源氏物語、挨拶、文化、竹取物語、宇津保物語

一

「挨拶」という語自体の、日本における歴史は、中世に始まるようだが、その実質、すなわち、集団における人間相互の良好な関係の構築、維持、確認を目的として交わされることばや身振りにおける行動^①は、この列島に生きる人間の具体的な生活のさまが、大陸の文献に記され始めた当初から存在した^②。

下戸^③與^④大人^⑤相^⑥逢道路^⑦、逡巡入^⑧草^⑨、傳^⑩辭説^⑪事、或蹲或跪、兩手據^⑫地、爲^⑬之恭敬^⑭、對應聲曰^⑮噫、比如^⑯然諾^⑰。(魏志倭人伝)

ここでは、同一文献の他の部分に、犯罪者を罰するに「尊卑各有^⑱差序^⑲」とあることから、倭国に身分意識の存在したことがうかがわれ、「下戸」の「大人」にむかつての応対に、身振りとは違いに關する定型のあつたことが知られる。「下戸」が「大人」にむかつて「恭敬」の態度を示し、「對應」するに「然諾」の如き声を発すること

とで、両者の人間関係が確認され、その円満な展開が望まれているわけである。しかも、「或蹲或跪、兩手據_レ地」という身振りは、その後の日本人の拝礼の動作との脈絡を想起させる。

こうした挨拶の表現は、その後、この地で成立した上代の文献にも見いだされる。二、三示そう。まず、古事記にみえる歌謡中の例。

山代の 筒木の宮に 母能麻袁須_{モノマヲス} 吾が兄の君は 涙ぐましも

（仁徳記）

この歌謡は、仁徳天皇の使者として皇后石之日売のもとに来た丸邇臣口子が示した、皇后に対するひたすらな恭敬の様を見かねた口子の妹口日売が、皇后に向かって口子の謁見を許すよう訴えた時のものである。この「物申す」とは、侍女である口日売が皇后という高位の存在である主人石之日売に、主人への発話開始をつけることばであったが、身分差のある人間同士の会話の成立を容易には許さなかつた古代社会において、目下の者が上位の者に言葉を掛ける際に、その当の言葉に先立てて、上位者との身分差を前提に恐縮の念を示して、人間関係を損なわずに発話の許可を願う挨拶のことばであった（この時の身振りの如何は記されていない）。この「物申す」は、上代以後も、現実の身分差が不安定な場合には、会話が成立する良好な人間関係構築を意図しての挨拶語として、定型化していく。

うちわたすをち方人に物まうすわれそのそこに白く咲けるはなに
の花ぞも

（古今和歌集卷一九）

有王、島の者にゆき向かつて、「物まうさう」と言へば、「何事」とこたふ。

（平家物語卷三・有王）

また、万葉集の長歌中の例。

好去好来歌一首 反歌二首

（言霊信仰に則り、天地の神々に守られて）： 値嘉の崎より 大伴の 三津の浜辺に 直泊_たてに み舟は泊てむ 都_つ美無久 佐伎久伊麻志弓 速帰坐勢_{はゆりませ}

（万葉集卷五）

この長歌は、天平五年三月に山上憶良が遣唐大使多治比広成に贈ったものである。その末部の「つつみなく幸いまして早帰りませ」は、題詞の「好去好来」に対応して、大使一行の無事の帰国を祈ることばで、現在でも同類のものが用いられる別れの挨拶であるのだが、危険な船旅を含む永の別れに際してこうした心寄せのことばを、この時自らの宅で対面を賜りもした広成に贈ることばで、憶良は広成への自分の好意と親密な人間関係の存在を表明し、彼との良好な関係が別離後も再会後も継続することを望む姿勢を示しているわけである（この長歌を具体的にどのように贈り、またその時に挨拶の身振りがあつたのかどうかは記されておらず不明である）。

また、書状に以後永く用いられることになる「謹啓」「跪承芳音」「謹上」「謹申」「謹通……」（万葉集、正倉院文書）などの挨拶語も、漢文の影響下に現れている。

このように、挨拶という行動は、日本人においても古くから一般的だったわけだが、その具体的様相は、既に言われているように、そして上記のわずかの例においても察せられるように、その時代の社会状況を基盤に、人々の生活文化の傾向と結び付きつつ、人間関係の親疎・待遇意識、普段の生活（出会、書簡、訪問、辞去）においてか臨時

の儀式等の場面においてか、などの諸条件に規定されて、主体が、定式化（簡略化あるいは・様式化）された表現によるか新規の個別の表現によるかも含めて、一回限りの挨拶の行動として、個々に扱ひ採つたものどもである。つまり、個々の挨拶の表現は、そうした諸要素の複合した主体的なものとしてある。従つて、人が、又は作品が、どのような挨拶を行い、描いているかを検討することによつて、ものによつては、そこからその人のその時の意識・人間関係・境遇、または作品の性格と構成法一般、さらには、その背後の当時の社会・文化の状況などが知られることにもなる。本稿は、そうした視点から、挨拶の諸相が比較的豊富に記録されるようになる平安時代、特に源氏物語を中心に、挨拶のことばと表現を（身振りの様はほとんど記されないの、ことばが対象の中心となる）、整理・分析すること、（登場）人物や作品の個性、平安時代中期の社会相文化相をうかがつてみようとするものである。

二

源氏物語の挨拶のことばを見るに先立つて、それと比較するためこの時期の幾つかの作品の挨拶のさまをのぞいておこう。

まず、源氏物語と同じ作り物語の先駆けとして竹取物語を見る。この物語では、最初に、公的文書や寿詞など広義の挨拶の形式が言及のみでなく、具体的に記されるのが、目につく。

文をはさみて申す、「くもん司の匠、あやべのうち磨申さく、玉の木を作り仕ふまつりし事、……」。

「楯取の御神、きこしめせ。をどなく、心をさなく龍を殺さむと思ひけり。……」とよ事をはなちて……。

これは、文挟みを用いた上申書や寿詞が非日常的な文章であるために、読者に与えるリアルな効果が意図されたことと（源氏物語が、漢詩の具体を隠して、「ふみなど講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえよみやらす、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にもいみじう思へり」〔花宴〕と述べて済ましてしまうのに比べれば、竹取物語のほうが読者に対して遙かに誠実であるといえよう）、これらによつて、くらもちの皇子の苦勞話と玉の枝が作り物であることが暴露されたり、大納言大伴のみゆきが瀕死の体験を経て、龍の首の玉取りというタブーの侵犯をけしかけたかぐや姫への執着を心底から捨て去るに至るといふ、求婚譚の流れの転換点としての重要性とよらみられる。

また、今問題としている、良好な人間関係を構築・維持・確認するような挨拶という点からみるならば、「唐にを」り中国語を母国語とすると思われる「わうけい」の、日本人である「右大臣あべのみむらじ」にあてた書状が、

「火鼠の皮衣、此国になき物也。をとには聞けども、いまだ見ぬなり。世にあるものならば、この国にももてまうで来なまし。いと難きあきなひなり。……」

「火鼠の皮衣、からうじて、人を出して求めたてまつる。今の世にも、昔の世にも、此皮はたはやすくなき物なり。……」

などと、かなりこなれた和文で表記されているのも注意されるが、これは、作品の主要な読者である漢文の教養から遠い女性たちの存在を

考慮した「物語的虚構」とも考えられるから措いておくとして、幾つか注意すべきものがある。

一つは、昇天の段でかぐや姫を迎えにきた天人が、初対面の翁に向かつていきなり、「宮つこまろ、まうで来」と、特別の挨拶もなく、自尊の受け手尊敬語を用いて命令していること。ここに天人と翁の關係、およびその背後にある「月の都」の仙界と「穢き所」である地上との決定的な力の差が、天人の立場から言語的に明確に規定されているのである。話型上昇天せざるをえないかぐや姫の境遇はこんな所からもなまなましく肉付けされている。

次に、竹取物語には、「わうけい、文をひろげて見て、返事書く」と、継続する逐一の動作をそのまま記述するような、素朴な写実的描写態度がある中で、先の「わうけい」の書状もそうだが、かぐや姫が帝に書き残す手紙も、

「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とりみてまかりぬれば、くちをししく悲しき事。宮仕へ仕うまつらざるぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ず思しめされつらめども、心強くうけたまはらずなりにし事、なめげなる物に思しめし止められぬるなん、心にとまり侍りぬる

今ほとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでける」

とあつて、和歌が記されている手紙の終わりとはともかく（これとても、実例を参照するなら男性の書簡なら日付・署名・宛名の記載があつてもおかしくない）、⁽¹⁰⁾「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど」とある書き出しがこのとおりであつたらしいもの（同じく実例を参照す

るなら、冒頭直ちに用件に入る例がある）、これに先立つて物語では省略されている何か形式的な語句（次章参照）があつたのではないかという疑いも捨て切れないこと。例えば、源氏物語には、

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、

浦人のしほくむ袖にくらべ見よ波路へだつる夜の衣を
ものの色、したまへるさまなど、いとよらなり。 （須磨）

とあつて、須磨の源氏から京の紫上に送つた書簡は「心ことにこまかなりし」ものであつたというが、その書簡は当該箇所「二条の院へたてまつれたまふと、入道の宮のとは、書きもやりたまはず、くらされたまへり」とあるのみで文面は一切記されていないし、紫上からの返書も「あはれなること多くて」とあるものの、記されているのは「浦人の…」の歌のみである。また、同じく伊勢から送られて来た六条御息所の書簡も、「白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつけて、墨つきなど見所あり」と説明されながら、実際に紹介されている文面は、

なほうつつとは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなむ。さりとも年月は隔てたまはじと、思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめかる伊勢をの海士を思ひやれ藻塩垂るてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになり果つべきにか

(と多かり。)

伊勢島や潮干の渦にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり
(須磨)

とあるだけで、これが用紙の量にそぐうものなのか疑わしい。須磨巻以外では、次のような例もある。

ものまめやかに、あるべかしく書きたまひて、端に、「かく聞こゆるを、知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふる三稜の筋は絶えじを」となむありける。
(玉鬘)

このことは形式的な問題だが、重要なことと思う。

しかし、このかぐや姫の帝への書簡は、「わうけい」の商業取引の事務的内容の書簡とは性格が異なり、末尾の歌ともども実質的に帝への別れの挨拶となつている。これのみの文面であつたとしても差し障りは生じない。同じく昇天の段にある、かぐや姫が翁らに書き遺した書面も、帝への書簡ほどではないが、同様の性格のものとして見ておくことができるだろう。

「此国にうまれぬるとならば、なげかせたてまつらぬほどまで侍らで過ぎ別れぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨てたてまつりてまかる空よりも、落ちぬべき心地する」

また、口頭の会話の挨拶も、同じく次の二例のように、物語に記されているものが全文なのか、出会いの挨拶の語句は記すのを省略し肝要な部分のみのものなのか疑われるものが多い中で、

「くちもちの皇子様が」旅の御姿ながらおはしたり」と言へば、

会ひたてまつる。御子のたまはく、「命をすて、かの玉の杖持ちてきたるとて、かぐや姫に見せたまつり給へ」と言へば、

(勅使ふさ子を)竹取の家にかしこまりて請じ入れて、会へり。
女(媼ノコト)に内侍のたまふ、「帝の)仰せごとくに、かぐや姫のかたち優におはす也、よく見てまゐるべき由のたまはせつるになむ、参りつる」と言へば、

出会いの挨拶ではないが、唯一ほぼ挨拶の全文を記していると思われるものがある。昇天の段で、八月十五日近くの月を見て泣く理由を、翁たちに説明するところである。

親ども、「なに事ぞ」と問ひさわぐ。かぐや姫泣くく言ふ。

「さきくも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はん物ぞと思ひて、いま、で過ごし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。」

この箇所の前には、この年の春から月を見て嘆きはじめ、特に七月十五日にその様子がひどくなつたかぐや姫に対して、翁がその理由や嘆きの内容を聞いても、姫は、ただ「(月を)見れば、世間心ほそくあはれに侍る。なでふ物をかなげき侍るべき」とか、「思ふこともなし。物なん心ほそくおぼゆる」とばかり返事して、まともに答えず、翁の不安や疑念をはぐらかすさまが描かれていた。傍線部分は、これを受けて、かぐや姫がこうした対応をした事に関する申し開き・詫びの展開されている部分である。つまり、翁の善意に対して不誠実な態度を採っていたかぐや姫が、「さのみやはとて」真相を語るに際し、翁と

の良好な人間関係の維持・修復を意図して述べた口上・挨拶なのであるが、そこで注意されるのは、翁との別れが迫ったこの時期まで真相の告白を引き伸ばした理由が、告白したら翁たちが「かならず心惑ひし給はん物ぞと思」つたということである。かぐや姫の側の事情ではなく、翁たちを思いやつてのことであつた。この人間としてのかぐや姫の優しさは、求婚者中納言いそのかみのまるたりの死を聞いて「すこしあはれと思」つたのを先蹤として、この昇天の段で、天の羽衣着後の天人としてのかぐや姫の非情さに対比されて、人間として最後の瞬間に、かぐや姫が翁たちや帝に書き遺したことがや行動に、効果的に印象的に語られるのだが、この傍線部の口上・挨拶は、これらの箇所の優しさとかぐや姫の内深く繋がっているものなのであつた。

なお、是非言及しておかなくてはならないのが、挨拶としての和歌の存在である。この物語では、求婚者たちのそもその懸想のはじめにおける和歌の送付はほぼ完璧に行われたと推測されるが、それらは記されておらず、五人の求婚譚が難題を核にしているために、入手を要求され献呈された（偽の）仏の御石の鉢・（偽の）蓬萊山の玉の枝・（偽の）火鼠の皮衣に添えられている歌と（それぞれにかぐや姫の返歌あり）、

海山の道に心をつくし果てないしのはちの涙ながれき

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手をらでたゞに帰らざらまし
限りなきおもひに焼けぬ皮衣袂かはきてけふこそはきめ

くらもちの皇子の虚構の苦勞話に感激し、それに敬意を表した竹取の翁の歌（くらもちの皇子の返歌あり）、

くれ竹のよゝの竹とり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し
中納言いそのかみのまるたりが怪我をし衰弱しているのを見舞つたかぐや姫の歌（中納言いそのかみのまるたりの返歌あり）、
年をへて浪たちよらぬ住の江の松かひなしときくはまことか
竹取の翁の家を訪れた帝が、別れに際してかぐや姫に詠んだ歌（かぐや姫の返歌あり）、

帰るさのみゆき物うく思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ
が、それぞれ挨拶の歌として記され、その役目を果たしている。ただこれらは、純粋な挨拶のことばに終わらず、その贈り物や状況に即しての自分の気持ちや盛り込み添えているところに特色がある。その点では、かぐや姫が昇天するに際して帝に送った、

今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでける
の歌も（ふじの山の帝の歌が返歌に相当）、書簡の文章に添えられていてその独立性は疑われるが、これらと相通じる性格を見いだせる。

このことは和歌が、この時期純粋な文学として以外にも、「やや改まった、言語生活のはれの方面に関することの多い」実用的な形式として存在しており、当時の人々が「いくらか改まって自分の気持を述べようとすると、和歌の形式をとつてあらわされることになる」のが一般だったからであると思われるが、こうした挨拶の和歌の存在はそれら逐一存在する返歌とともに、かぐや姫への執着を捨てた大伴のみゆきの大納言の話を除いて、天皇を含めた求婚者の挿話と昇天の段全てに用いられることで、主要な登場人物のその時の心情を結晶化させ

ていることになる。

こうして、竹取物語において挨拶の表現は、和歌を含め、最後の昇天の段を中心に、さほどの無駄もなくほぼ適切にめりはりの効いた用いられ方がされているといえる。これは源氏物語の中で竹取物語が「物語の出で来はじめの祖」と評されたことに恥じない現象であろう。

三

次に、源氏物語に先立つ長編物語として源氏物語が創作されるにあたってその存在が意識され、そこから多くのモチーフも提供された宇津保物語における挨拶の表現を見てみよう。この物語に、儀式的場での多掲を含め竹取物語以上に和歌が挨拶に用いられていることは一目瞭然なので、和歌について特には触れないが、竹取物語の段階から進んで、書簡では、和歌を核としつつ、前後に詞を伴ったり、それと融合している形式の例が見られるのを、源氏物語との関係では注意しておこう。

「このみや浅茅繁きと思へどもまた律生ほす宿もありとか

同じくは、同じ野にや思し召し給はぬ」とて、をかしき浅茅に御

文さしたり。…。(忠こそ)

「久しく候はで、かしこまり聞こゆるに、賜はせたるをなむ。かの承りしことは、『かくなむ』とものすべき人、見聞かぬ心になむ。春日は、

目に近くをりて祈れど春日野の森の榊葉色も変はらず
効なき巫覡にこそ」とて奉り給へり。(藤原の君)

また、こうした和歌とともに、緩慢な構成を持つこの作品の、二十巻におよぶ長編の叙述を埋めているのが、当時の貴族の日常生活と儀式の詳細な記述であるのだが、そのためそこに記される種々の挨拶のさまも、概して日常的・一般的であり、内容もそれに呼応して素直で単純なものが多い。

おとど、参り給ひて、御前に候ひ給ふ。上、「久しく参られざりつるかな」。おとど、「侍る所にし触穢の候ひつれば。なほ、かの後は、労り所(産養)の侍りしかば。上、「さりけむ。そのほどのことどもは、いかがありけむ。…」(蔵開・上)

正頼と朱雀帝の久々の対面時の挨拶だが、のどかなものである。書簡の場合も同様である。

大宮の御文、尚侍のおとどの御もとに、「近くものし給ひつるほどだに聞こえさせまほしかりつるを、騒がしくのみありつればなむ。いとうれしく、残り少なく思ほえつるを、行く先長くなる心地して、物の音の、いともいともあはれなるをなむ。…」(蔵開・上)

そして、貴重なのは、具体的な挨拶のさまがそこから知られることである。例えば、右の例もそうだが、長期間会わずにいた場合には、「久しくもなりにけるかな」(菊の宴)・「あな久しや」(菊の宴)・「久しく参らず」(楼上・上)・「おほつかなくなむ」(菊の宴)・「げに、おほつかなきほどになり侍りにけるかな」(楼上・上)などと言ひ、また、辞去する際には、「今なむまかづる」(蔵開・下)・「かう近きほどなるを、さし歩みつつ参り来む」(国譲・中)〔蜻蛉日

記にも「今来むよ」とみえる」、などと、言う。書簡では、当時貴重だった紙を節約するためか、また双方の親密さや用件の事前の了解などの事情もあつてか、書き出しは直ちに用件に入っていると見られる場合もあるが、形式的には「日ごろ、もの騒がしくて聞こえずなりにけれ」（蔵開・上）などと言つたりもする。返書の書き出しでは、「承りぬ」（国譲・下）・「かしこまりて承りぬ」（蔵開・上、国譲・中）・「見給へつ」（国譲・下）などの形式があり、閉じめには、「ことごとには、みづから聞こえさせむ」（蔵開・上、源氏物語夢浮橋にも同様の語句がある）などとも言ふ。その他では、帰宅したときには、「ただ今なむまかでつる」（沖つ白波）、人の言動に恐縮するときには、「はなはだかしこし」（吹上・上、菊の宴）・「あなかしこ」（内侍のみみ）・「いとかしこし」（沖つ白波）などと言う。

また、「よろこび」という語が慶事の報告・礼の行為を、「かしこまり」が詫び・申し開きの行為を、「とぶらひ」が見舞・訪問などの挨拶行為をそれぞれ意味する語として用いられているが、挨拶自体を指している可能性を持つ語に、「もの聞こゆ」「ものたまふ」（「ものいふ」がある（第一章に触れた「ものまうす」と同類）。

大将のおとど（正頼）、御局に参り給へり。宮（春宮）、「なほ、ここに」などのたまはずれば、御前に候ひ給ふ。物など聞こえ給ひて、「仲澄は、なにか久しく参らぬ」。（あて宮）

大将のおとど（正頼）参り給へり。上おはしますとて、隠れたる方に候ひ給ふ。上、召し出でて、物などのたまはせて、『暇文出だされて久しくなりぬ』と聞きつるは何ごとぞ。（沖つ白波）

これらの「もの聞こゆ」「ものたまふ」は、もとの形である「ものいふ」が必ずしも言語的挨拶行為を指すことばではないから断定はできないのだが、右の例では、対座後、具体的な話題に入る前に「物など聞こえ」「のたまはせて」いるので、「ものいふ」内容は一般的な挨拶が自然かと思われるし、近代の方言では、「ものいい」「ものいい」が挨拶や新婚の礼まわりを指すと報告されてもいるからである。¹⁴ 同じくまた、「物語」の語もこの中に挨拶を含んでいる可能性がある。次のような例が宇津保物語と源氏物語にあるからである。

（藤壺が今上帝のもとに）参上らせ給ひて、月ごろの御物語、遅く参らせ給へることなど、かたみに聞こえ給ひつつ、まだ大殿籠もらぬに、
（国譲・下）

（内大臣が夕霧を藤の花の宴に招いて）対面したまふ。ものまめやかに、むべむべしき御物語は、すこしばかりにて、花の興に移りたまひぬ。
（源氏・藤裏葉）

これらでは、「御物語」がうち解け話等に先んじて交わされている。こうして、宇津保物語では、日常的・一般的・具体的な挨拶のさまがそこから知られて、資料的にも貴重なのだが、のみならず、表現的にも注意しておくべきものがある。というのは、概して素直・単純な挨拶表現が多いなかで、例えば次のように、自己の立場と相手への気遣いとで十分委曲を尽くしたものも拾えるし、

（北山のうつほに再度俊蔭女を迎えるべく尋ねた兼雅は）入りおはして、『前にも『聞こえむ』と思ひしかど、『まだきに聞こえたらば、かうもぞあらがひ給ふ』とてなむ。我ぞ、賀茂詣での御供

にて、見奉りし。その時は、聞こえしやうに、求め騒がれけるに、参りたりしかば、いみじうむつかり給ひて、おはしましし限り、片時も御身放ち給はず、『隠れ心ある人なり。逃がすな』とて、いささかも立ち退けば、人をつけてまもらせ給ひしかばなむ、『いかならむ世に参り来む』と思はぬ時なかりしかど、みづからならでは、おはせし所見たる人もなくて、え聞こえざりしに、殿隠れ給ひて後、住み給ひし所を見しかど、いとど野のやうになりて、尋ね聞こゆべき方もなかりしかば、行く方なく、おぼつかなきを、年頃思ひ嘆きつるは、さは、かうておはしけるなりけりと、泣く泣くのためへば、…

(俊蔭)

(正頼が妻大宮の意を体して、あて宮の求婚者であつた源実忠に他の娘との結婚を提案したことに對する、実忠の断りの返書) 宮の御返り聞こえ給ふ。「げに、おぼつかなきほどになり侍りけるを、かしこまりて聞こえさするに、いともかしこき仰せ言は、かしこまりて承りぬるを、年頃、いかに侍るにか侍らむ、『世の中に侍らむ』とも思ひ給へぬを、あやしく、今まで巡らひ侍れども、えなほ侍るまじく思ひ給へらるれば、御被けらるべきほどなかるべきをなむ、返す返すかしこまり聞こえさする。いでや、さても、消え返り染め来しものと同じ野の花に置くとも何か見ゆべきあなかしこ。昔は、さる心もや侍りけむ」などなむ。

(沖つ白波)

また、挨拶の中に恨みや不満・あてこすりが入り込んでいても、多くは悪意のない率直なものであるのに(これらは親しい間柄か目下の者

に對してのものに多い)、

(妹の梨壺女御から仲忠への祝いの品に添えた書簡を) 中納言見給へば、「おぼつかなきまでなりにけるをなむ。久しう見え給はぬを、あやしく思ひつるに、ただ昨日なむ、『(出産の件を伺つて) ことわりなるやうにて』とは承りし。まことや、(贈り物の) この鳥は…」

(蔵開・上)

(仁寿殿女御から朱雀帝の鞞負乳母へ書簡) 御文遣はず。「日ごろ、もの騒がしくて、聞こえずなりにけれ。などか、それよりも訪ひ給はぬ。さて、これは、子持ちの御残り物なり。…」

(蔵開・上)

(桂へ移つた姪の女一宮への藤壺女御からの書簡) 見給へば、「日ごろ、『惱ませ給ふ』と承りつれば、『いかにして参り来む』と思ひ給へつれど、ここにも、また、いと苦しく侍るを思う給へつるほどに、いと遠く渡らせ給ひにければ。七瀬の旅にてなんどにや。…」

(国讓・中)

中には、現実の人間の醜さを見据えて、自己保身のため、人との出会いに際し、嘘をついたり、自己の無沙汰や不誠実の理由を相手になすりつけ、おためごかしになっているものもあるからである。

(昔から執心していた俊蔭女に琴を弾かせたいために、その息子仲忠を使つて無理に俊蔭女を参内させた朱雀帝の言い訳) 上、御几帳の元、褥うち敷きて居給ひて、客人に物語し給ふ、「今宵、仲忠の朝臣に言ふ言ありつれば、『みづからは、えせずなむあるべき。代はりを』などものしつれば、『いかなる代はりをかは』

と思ひつるは。年頃の心ざしのあらはるるにこそはありけれ」。

北の方、「いとあやしく、例よりも思ふ給へられつるを、…」。

（内侍のかみ）

傍線部は嘘で、当初から帝自身が俊蔭女の琴を催促していた。

（実忠が、所在不明となつていた北の方と再会すべく来室すると、北の方は）几帳押し出でて対面し給へば、中納言、「昔、恥ぢ聞こえしなめりしにだに、さもあらざめるを」とて、几帳押しやりて見奉り給へば、昔に劣り給はず。…中納言、「あなめづらしや。いと久しうなりにけるかな。あさましう、あり所も知らせ給はざりつれば、年頃、山里のつれづれ、春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど、尋ね聞こえむ方なくて。…」（中納言）「（父の臨終の折、あなたの消息を聞いたが）すなはち思ひになりにかば、今まで（連絡をとりませんでした）。すなはち聞こえむとせしかど、（あなたが）心深き所つき給へりしかば、いかにぞ思ひ慎みてなむ」。北の方、「（あなたの噂はきいていましたが、懸想していたあて宮との結婚が叶わず、私と同様傷心と思ひ）…、「いかで訪ひ聞こえむ」と思ひつれど、『それにつけても、思ほすことやあらむ』とてなむ（氣を遣つて連絡しませんでした）」。中納言、「何かは。今までは。しばしこそ、人（「あなた）を、『憎し』とは思ひしか」など、…（国讓・中）

—北の方が、実忠から身を隠したのは、実忠があて宮に深く執心して北の方と子供達を長く訪れず、かつそれにより他の男が北の方に求婚を強く迫つたからであつた（菊の宴）。

（一条殿に別居する女三宮を三条殿に迎えるべく訪問した兼雅のことば）おとど、「年頃は、あさましく、朝廷にも捨てられ奉りたるやうにて。昔は、『行く先、もし、人並み並みにや』と思ふ給へて、かかる宮仕へ（＝結婚生活）も、さる方なりしを、今日は、限りのやうなる身に侍れば、（官途の滞つた夫が）候はむも御面伏せなるやうなれば、かかる身にありぬべき物のもとに籠もり侍るを、さてのみやは。行く先も短くなりぬる心地し侍ればなむ、『海人の苫屋のやうなる所に、時々、通ひおはしましなむや』と聞こえたりし」。宮、さらに、「年ごろ見ざりつる」とも思したらで、…（蔵開・下）

—兼雅は、自身の訪問に先立つて、仲忠を使者に立て三条殿移住を提案した際、女三宮が兼雅の愛情が冷めて父嵯峨院に合わせる顔がないと言つたことに対して、報告者仲忠を前にして、「あはれにもたまふなるかな。昔のやうにて（一条殿に通つて）侍らむだに、（最愛の妻尚侍が存在するから）御面伏せにこそあれ。今は、まして、（尚侍のいる三条殿に同居することを承知したのだから、父院の面目にとつて）何の効もあらじを。…」（蔵開・中）などと、述べていた。

こうした自己保身的な挨拶は、以上の三例いずれも男女間の恋愛・結婚生活と関係しているのが注意される。男女間の感情のもつれは、挨拶・会話・書簡を問わず自己防衛と対者攻撃の要素をもたらしやすい。

（兼雅・俊蔭女・仲忠親子と対立する女三宮・梨壺母子）（女三宮）「月頃、若き人（梨壺）の一人候ひ給へば、後ろめたさに、

ここに待るを、異人は、さもこそ訪う給はざらめ。そこ(仲忠)

にさへ、いと疎くこそ思したれ。仲忠、「あなかしこ。…かし

こけれど、姫君など宮に候ひ給へば、数ならず思さるとも、世の

人の親しく候はむよりは、心殊に思ほさむなむ、いとうれしく待

るべき。宮、「さらにもものたまふかな。この候ひ給ふ人は、親

(兼雅)も思ほし忘れ給ふめれば、世の中にあはれに心細げなる

人なめり。はらからも、何につけてか思さむ、なほ、あはれなる

ものの心苦しきに思ほして、訪ひ給へかし。(内侍のかみ)

(立太子問題で齟齬していた今上帝と藤壺)(帝)「立ち返り聞こ

えても、おぼつかなく、度々のを、『見つ』とだにあらざりしか

ば。見る人もあやしがりしを、常に、世の例にはあらでもありぬ

べしや。月頃は、あるやうにもあらずや」とて、…御返り、

(藤壺)「いとめづらしう賜はせ給へるは、かしこまりて承りぬ。

いともいともうれしき御喜びは、『まづ奏せむ』と思ひ給へしか

ども、月頃は、仰せ言も侍らざりしかば、『いかなる御気色にか』

と思ひ給へ慎みてなむ。…(国譲・下)

(兼雅と無沙汰していた妻宰相君)(兼雅)「あまましう、年ごろ

になりけるおぼつかなき、心よりほかにてなむ。『いづく』と

も知らせ給はざりけるもことわりなれど、よろづ心憂く。大将聞

こえられければ、あはれなる人(息子の小君)も、あやしう、ま

たも見せ知らせ給はざりしかば、いとおぼつかなきを。今は、さ

てのみは、いかでかは。いとよう、心安くて渡り給ひぬべきなむ

侍る。…。(宰相君)「めづらしく見給へつるは。げにおぼつ

かなきほどになりけるにや。…これ(贈り物の衣料)は、

『またや隔てむ』と見給ふるも、今更に、あいなき方や」と聞こ

え給へり。(楼上・上)

この物語では、男性同士の対立がほとんど描かれない(立太子争い

においても藤原氏の男性は源正頼方と競う意志がない)から、このよう

な自己防衛と他者攻撃的な要素の顕著な部分が、男女間の問題に現れ

たのであろう。

このように、宇津保物語の挨拶の表現は、当時の挨拶の一般を知る

資料的意味と、また、男女間の問題を中心とした生身の人間の行動を

反映させて、次の長編物語である源氏物語に繋いだという点で、十分

価値のあるものといえる。源氏物語の挨拶表現は、これらを踏まえて、

宇津保物語以上に屈折のあるものが多くなる。

四

次に、ジャンルは異なるが、源氏物語と同時代の作である枕草子を

見ておこう。枕草子の中には、「よろこび奏すること、をかしけれ」

(同名段)と挨拶行為に言及するものや、「なにがしきぶらふ」(頭の

中将のすずるなるそら言を聞きて)・「かうてさぶらふ」(二月つごも

りころに、風いたう吹きて)・「左大弁にももの聞こえむ」(二月、官の

司に定考といふことすなる)などの、応対を求める挨拶表現は見いだ

せるが、予想外に本格的な挨拶の描写は少ない。わずかに、

大納言殿のまゐりたまへるなりけり。…柱もとに居たまひて、

「昨日、今日、物忌みにはべりつれど、雪のいたく降りはべりつ

れば、おぼつかなきになむ」と申したまふ。「道もなしと思ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。うち笑ひたまひて、「あはれともや御覧ずるとて」などのたまふ御有様ども、これより何ごとかはまさらむ、物語にいみじう口にまかせて言ひたるに違はざめりと、おぼゆ。（宮にはじめてまゐりたるころ）

が、拾えるだけである。

ここでは、雪の降り積もる中、中宮定子の御所を兄の伊周が訪問し、昨日以来の物忌みにもかかわらずこの雪を心配して来訪したと挨拶する。と中宮は、平兼盛の「山里は雪降りつみて道もなし今日来む人をあはれとは見む」（拾遺集巻四）の歌の第三句を引いて対応した。伊周は同じく第五句を踏まえてそれに応えた。つまり、作者が、挨拶の描写をほとんど行わないこの作品の中で、唯一この場面を描いたのは、挨拶自体に関心があったのではなく、そこに息づいている、折を踏まえた機智と教養に満ちあふれる主人筋二人のやりとりを記録し、物語の中の作り話のようだとほめあげるためだったからとみられる。

このように、枕草子には本格的な挨拶の描写は原則的に存在せず（それが不要なほどに親密でフランクな人間関係の世界を描いているとみられる）、あるのは、天皇に官位昇進の「よろこび奏する」儀式と、中宮女房らに応対を求める男性官吏の姿、及びその逆関係と、中宮兄妹の賛嘆すべき機智と教養とであり、これらは結局、枕草子が、中宮御所と天皇の周辺での見聞とそこにあるべき文化とを記したことに由来するものなのである。ということは、源氏物語が挨拶という面で枕草子から引き継ぐべきものは宮廷生活における文化としてのそれ

であったということになる。実際それは源氏物語において実現されているように思われる。源氏物語五十四帖における最初のトピックは、主人公光源氏の母桐壺更衣の死とその経緯であるが、その死が現実となる時、更衣はまさに後宮内で、おのれの死を覚悟しつつも帝寵に感謝する別れの和歌と詞とをわずかに残る力を振り絞って桐壺帝に告げているのである。¹⁷源氏物語は緊迫した宮廷生活の中で文化としての挨拶とともに始まっている。

こうして、源氏物語における挨拶のことばの質を考えようとするとき、本稿で扱った、『竹取物語』『宇津保物語』『枕草子』の挨拶表現だけでも、それぞれ重要な意味で源氏物語に流れ込んでいって、源氏物語の世界構成に与かっているとみておくことができる。ここでは扱わなかった『伊勢物語』『蜻蛉日記』などとの繋がりも含め、当の源氏物語の挨拶表現の分析とその性格の考察は、また機を改めて行いたい。ここでは、源氏物語成立の糧となった先行文学との脈絡をたどったことで、ひとまず筆を擱く。

注

(1) 「挨拶」についての規定は、コミュニケーション一般とどこまで関連づけるか、日常生活の場に限るのか儀式の場までも含めるのか、人以外の超越的存在・自然物に対する行動をどう区別するか、などの点において論者の考え方・立場により相違があるが、ここでは、文学作品を主要な対象とするという資料的制約や、源氏物語などの作り物語が、同物語に「世に経る人のありさまの、

- 見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおきはじめた」(蚩)とあるごとく、現世の人間の生きざまを対象にしているという性格もあるため、日常生活を中心とした円滑な人間関係にかかわる行動を重視した。従って、人間関係を破壊(相手を攻撃)するための「挨拶」は、結果的にそうなった場合を除いて、「人間相互の良好な関係の構築、維持、確認を目的として交わされる」挨拶の形式を利用した、「挨拶」の意図的変容と見なされることになるし、さらにまた、相手とのその内実が問われないコミュニケーションの開始・終了自体も、それだけでは直ちに挨拶とはならないことになる。柳田国男「あいさつの言葉」『毎日の言葉』、青木保「儀礼の象徴性」、『新社会学事典』(有斐閣)、田島毓堂「あいさつ」『講座日本語の語彙9語誌1』、『日本語学』第4巻8号、昭和六十年八月、『国文学』第44巻6号、平成十一月五月、等を参照されたい。
- (2) 「倭」についての記事自体は、それ以前にも、「樂浪海中有一倭人」、分爲「百餘國」、以「二歳時」來獻見云」(漢書地理志・燕地)などがある。
- (3) 橋本四郎「古代の言語生活」『講座 国語史6 文体史・言語生活史』。
- (4) 従って、会話の開始にあたって用いられる挨拶語を、「渡し守舟渡せをと 呼ぶ声の…」(万葉集卷二十)・「添ひ臥して、『や』と、おどろかしたまへど」(源氏物語・夕顔)などの、単なる呼びかけの語と混同してはならない。どちらも言語的コミュニケーションの開始にかかわっているが、挨拶は、聞き手との良好な人間関係を意識して、滑らかなコミュニケーションの展開を庶幾するものである。井手至「意味上の文の種類とその構成・史的考察」『講座日本語学2 文法史』参照。
- (5) 久曾神昇『平安時代仮名書状の研究』、遠藤好英「書簡のあいさつことばの歴史」『国文学』44-6、参照。

- (6) 注(1)に同じ。
- (7) 竹取物語の引用は日本古典文学大系本による。
- (8) 源氏物語の引用は新潮日本古典集成本による。
- (9) 注(5)の久曾神氏著。
- (10) 注(5)の久曾神氏著に平安後期のものだが、仮名書状におけるこうした実例が紹介されている。
- (11) 西村亨「末流のうた」『日本語講座第二巻 ことばの遊びと芸術』。
- (12) 宇津保物語の引用は、室城秀之「うつほ物語」による。
- (13) 注(10)に同じ。
- (14) 柳田国男「あいさつの言葉」『毎日の言葉』。
- (15) 嘘についている挨拶には、他に、当初から吹上訪問が目的で下向したのに、正頼に対して次のように答えた仲頼のものがある。「(正頼)『日ごろ、内裏にも参り給はず、このわたりにも、またものし給はざりつれば、いふかり申しつるになむ』。少将、『はなはだかしこし。』粉河に、いささか願果たさむ』と思う給へて、紀伊国の方にまかりたりしを、あやしき人に見給へつきて、え参上り来ざりつるを、からうしてなむ、昨夜参上り来し』(吹上・上)。しかし、この程度の嘘は、朱雀帝の傍迷惑な嘘に比べれば、日常生活の飾りといえよう。
- (16) 枕草子の引用は、角川文庫本による。
- (17) 拙稿「桐重更衣の歌」本誌第79号、平成七年三月。

(うえの たつよし 国文学科)

一九九九年十月十五日受理